



マヤの伝統を受け継ぐ織物は、先住民の重要な文化的資産だ。一枚作ると150ケツアル(約2万円)で売れ、その7割ほどが利益となって手元に残る



グアテマラへ協同組合融資委員会の視察。融資後のフォローアップが、女性たちの夢の実現と返済率の高さにつながっている

# PLAYERS

国際協力の担い手たち

## 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

### 先住民女性が自ら生計を立てるために

1996年まで内戦が続く、人々の絆が引き裂かれたグアテマラ。中でも大きな影響を受けたのは、先住民、それも女性たちだ。教育を受けられず、収入の手段も限られている彼女たちが新たな生活に踏み出せるよう、日本ラテンアメリカ協力ネットワークはマイクロクレジット事業を通じて彼女たちを支えている。



現地女性たちの話を聞く日本ラテンアメリカ協力ネットワークの石川智子さん。融資を受けて自ら収入につながる事業を始めることで、女性たちの自覚が変わってくるという



内戦で夫を亡くし、息子を育て上げたマリア・ラファエラ・クンさん。昨年亡くなった弟の妻と共に融資を受け、織物作りや豚などの家畜飼育によって弟の5人の子どもを育てている

同組合が手掛けていた女性たちへの融資を支えるには十分な額でした。借り入れを元にさまざまな事業を始めた女性たちに収入が生まれ、家族と共に良い食事をしたり、子どもを学校に通わせたりすることができるようになっています。また、女性たちの気持ちにも変化が生まれ、自信を持てるようになったり、家計の管理ができるようになったりしています。そう話してくれたのは、日本ラテンアメリカ協力ネットワーク運営委員の新川志保子さんだ。「マイクロクレジット事業を始めて5年になりますが、これまで支払いが数日遅延することはあっても、返済率は100%となっています」

### わずかな元手が生む循環 家族や社会が少しづつ豊かに

このマイクロクレジット事業では、女性たちに担保の有無と返済の意志を確認した上で、融資を受けたら何をしたいのか、それが収入につながるかを尋ねている。ただお金を手渡すだけでなく、それで生計を立てられるようにすることが目的だからだ。貸付期間は1年だが、借り手の状況次第で3〜5年と継続して融資することが多いという。さらには、融資をしたら返済まで黙って待っているのではなく、ワークショップを通して利用者がお金の運用などについて学ぶ機会を作ったり、協同組合の職員と会計士が利用者を毎月

訪問して進捗状況を確認したりするなど、女性自身の管理能力を引き出すような働き掛けを積極的に行っている。100%の返済率は、こうした地道な取り組みの結果でもある。

融資を受けた女性たちも、自分なりに工夫を重ねている。内戦で夫を失い、一人で息子を育てているマリア・ハコボ・ヒアツツさんは、初めての融資で野菜の種や苗を買った。育った野菜を売って得た収入の一部は再び野菜作りに使い、残り近所の農家から牛乳を買ってチーズ作りを開始。野菜とチーズの売り上げで、息子は学校に通い続けられるようになった。また、マリアさんに牛乳を売る農家も収入が増えるなど、周囲にも恩恵が及んでいるという。

他にも、弟の妻と共に融資を受けて織物と牧畜で少しづつ資産作りを進める女性や、自分の子どもに加えて両親を失った親戚の子どもを引き取り、織物の仕事から得た収入で学校に通わせる女性など、さまざまな形で社会全体にインパクトを与えている例が数多くあるという。わずかな額でも収入があることで、日々の食事に肉やコメなど新しい食材を追加できるようになり、子どもたちの栄養改善につながっている。家庭は数え切れない。女性たちが金融サービスにアクセスできるようになったことが、地域全体の生活改善と貧困削減につながっているのだ。

「返済率100%を実現できている

### 内戦が引き裂いたマヤの国 しわ寄せは弱い人たちに

マヤ系の先住民が人口の過半数を占めるグアテマラ。1960年から96年まで内戦が続く、多くの人が殺されたり、行方不明になったり、あるいは故郷から他の地域への避難を余儀なくされたりするなど、国内の情勢は過酷を極めた。中でも、特に厳しい状況に置かれたのが先住民女性たちだ。教育を受ける機会が十分に得られず、スペイン語さえ話せないことも多い彼女たち自身には、収入の手段がほとんどなかった。ましてや、銀行からお金を借りるなど、まず不可能だ。

夫を失い、子どもと共に路頭に迷った女性たちは、生き延びるために努力を重ねた。住民のほとんどが貧困に苦しむ先住民だというポアキルでは、30年ほど前に夫を失った地元的女性たち

ので、戻ってきた資金が新たな融資につながり、さらに多くの人たちが恩恵を受けることができるようになっていきます」と話す新川さん。マイクロクレジット事業は今後も継続し、より多くの女性たちの生活上と、地域の貧困削減を目指す予定だ。それに加えて、グアテマラの他の地域でもコミュニティ全体で子どもの教育に取り組みんだり、障害がある子どもや青少年の自立支援を行ったりしていくという。生活を改めていくことはグアテマラの女性たち自身にしかできないが、新川さんたちは日本のドナーとの橋渡しや、プロジェクトに対するアドバイスなどの形で彼女たちの自立を支援している。お金という形を取った日本の人々の善意が、グアテマラの農村社会に確かなインパクトを与えている。



融資を受けて松の苗木づくりを始めたイルマ・サニックさん。女性たちは創意工夫を凝らして、さまざまな事業を生み出している

がグアテマラへ協同組合を作り、今でも互いを支えあっている。同組合は、「世界の人びとのためのJICA基金(以下、JICA基金)」から資金の提供を受けて、地域の貧困女性たちにマイクロクレジットと呼ばれる無担保で小額の融資を行っている。仲立ちをした日本ラテンアメリカ協力ネットワークは、青年海外協力隊員として中南米で活動した人々が立ち上げた組織だ。これまでに、特に社会情勢が厳しかったグアテマラ農村部で子どもや女性を支援する活動の他、ニカラグアでも協力を進めてきた。

JICA基金は、市民や団体、企業からの寄付を通じて、その善意を飢餓や貧困などの解決に活用するもの。「JICA基金からの助成金額は比較的小規模でしたが、すでにグアテマラ協